

古 屋 茂 教 授

木 村 俊 房 (数学)

古屋茂先生が教養学部基礎科学科から本学部数学科へ正式に移られたのは昭和45年10月でしたが、既に昭和42年から併任教授として計画数学講座を担当されてこられました。先生が本数学科で教鞭をとるようになられたのはもっと古く昭和30年からでした。

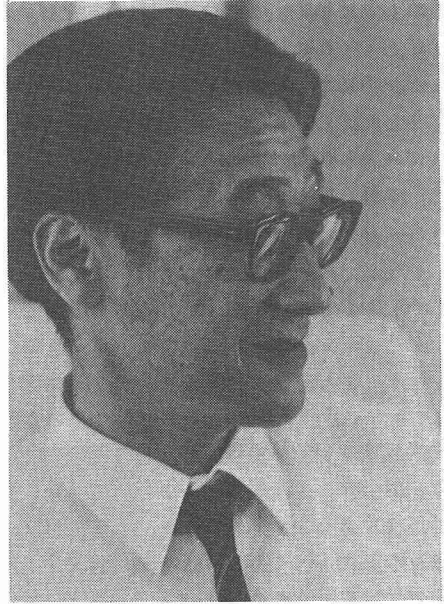
計画数学という言葉がある人には耳新しいように、この講座は昭和40年に始まる数学科増設の際設けられたものの一つです。この講座が設けられた必然性は学問的に見て当然のこととはいえ、新講座設立にはそれを担当するのにふさわしい人が必要です。ですから、その時すでにこの分野での第一人者であった先生の存在が、この講座新設に大きく影響したと言ってい過ぎでしょうか。

先生の御活躍の全貌をここで述べることはとてもできませんが、その一端でも触れることができたいと思います。

先生は昭和13年本学部数学科を御卒業になりました。この学年は小平邦彦、河田敬義両先生を初め伊藤清先生（現京大数理解析研究所教授、伊藤清三教授の御令兄）など錚々たる数学者を輩出したクラスとして有名です。一年間大学院で研鑽をつまされた後、昭和14年九大数学科助手になられ、翌15年同講師に進まれました。昭和16年中央航空研究所へ転出され、さらに鉄道技術研究所へ移られた後、昭和25年立教大学数学科教授になりました。先生が中央航空研究所、鉄道技術研究所へ行かれた経緯はよく存じませんが、先生が応用数学へなみなみならぬ情熱をお持ちであったことは想像に難くありません。

立教大学へ移られてからも、非線形振動論、境界値問題などで立派なお仕事をなさいましたが、戦後生まれ急速に発展しつつあった応用数学の諸分野、線形計画法、動的計画法、制御理論、組合せ数学、情報理論、数値解析などを精力的に吸収され、その研究、教育および普及に尽力されました。

昭和36年本学教養学部に移られ、基礎科学科新設に伴い昭和38年基礎数学講座を担当なされ、前述の如く昭和45年理学部へ配置換えにされました。基礎科学科創設の計画は先生が駒場へ移られる前からあったわけですが、当時の駒場数学科教室が、基礎科設



古屋教授の近影

立の議に参加し設立後はその数学部門を担当するのにふさわしい人は先生を描いていないと判断したのは、当然といえば当然のことでした。

先生が九大数学科へ赴任された昭和14年は数学科新設の年であり、中央航空研究所へ移られたのはその設立2年後、立教大学へかわられたのは数学科新設1年後のことでした。駒場、次いで本郷へ移られたのは、前述のごとく、新学科、新講座担当のためでした。京大へ数理解析研究所が設置されたのは昭和38年でしたが、その設立準備のための一つとして総合研究「数理科学」が発足するや、先生はその重要なメンバーとして活躍され、昭和42年から同研究所教授を併任しておられます。このように、先生が常に新設の教室、研究所へ迎えられたのは、先生の勝れた業績、行政手腕によるばかりでなく、時代に先駆けて新分野に取り組みられた高い見識と深い情熱によるものと推測しております。

先生が応用数学における第一人者であることは既に述べましたが、純粋数学においても勝れた学者であります。というより、純粋数学に勝っていたからこそ、応用数学においても第一人者になられたというべきでありましょう。事実、一年間の大学院時代、

Ahlforsの被覆面の理論についての報告，連続幾何学についての論文（小平先生と共著），正規行列についての論文（近藤孝一氏と共著）を発表されている程です。

先生は頭の回転が非常に早く，たとえば，数学書を読むのも実に早く，2日位で一冊の本を読まれてしまうこともまれではありません。また，問題を解くことがお得意で，その解き方の見事さにはいつも感心させられました。しかし，先生は御自分の明敏さを人にお隠しになっているようです。

学内，学外を問わず，いろいろな委員などを引受

けられましたが，先生はいつも真剣に問題を考え，おざなりにするなどということは一度もありませんでした。昭和48，49年度日本数学会理事長を勤められた時のことは印象的でした。数学会の制度に不備な所があるのにお気づきになるや，その整備刷新に黙々とお励みになりました。それを人にいうこともありませんでしたので，知らない人が多いのは残念でなりません。

聞く所によると，東大定年の後は，青山学院大学理工学部へ移られるそうですが，これからも我々を御指導下さるよう心からお願い申し上げる次第です。